第 17 号

巻頭言　出村　和彦
【アウグスティヌス・シンポジウム】
永遠と時間──アウグスティヌス『告白録』第十一巻をめぐって──　加藤　信朗
【追考】
アウグスティヌスの『告白録』における時間論の根源的な意味　荒井　洋一
【特定質問】
『告白録』第一一巻のいわゆる「時間論」を巡って　山田庄太郎
アウグスティヌス『告白録』第十一巻における「創世記」解釈と時間　田内　千里
「イエスによってつくられた」と語ることは妥当か　佐藤真基子
【論文】
Audiamus ──『告白』第九巻一〇章二五節における──　松村　康平
知解を求める讃美──『告白』一・一・一再論──　岡嵜　隆哲
神人的エネルゲイアの経験──意志的聴従のアナロギアに即して──　谷　隆一郎
トマス・アクィナスのキリスト論──「肯定の哲学」の原点──　山本　芳久
ディオニシオス・アレオパギテースのシンボル解釈とその原理
──聖書における若干の実例──　リアナ・トルファシュ
ユリアヌスの「ギリシア人の宗教」とナジアンゾスのグレゴリオス
『ユリアヌス駁論』における「ことば」と「真の愛智」　中西　恭子
シュジェールの光──擬ディオニュシオスとの類似と断絶について──　坂田奈々絵

第 18 号

巻頭言　宮本　久雄
【論文】
Tempus et Aduerbum Temporale　加藤　武
古代の神像の脱魔術化──エウセビオスの場合──　鐸木　道剛
三位一体における御父と御子の等しさ
──アウグスティヌス『マクシミヌス批判』にもとづいて──　平野和歌子
陽の昇るところから沈むところまで
──ビザンティン余白詩篇第四九（五〇）篇の重層的構造──　辻　絵理子
一二～一四世紀女性神秘家の〈実際的な叫び〉をめぐって　後藤　里菜
【講演】
シュネシオスと五世紀アレクサンドリアにおける夢解釈
──神に近づくこととしての夢見──　ブロンウェン・ニール（土橋恵子 訳）
【解題】
シュネシオスと夢解釈　土橋　茂樹
【宮本久雄先生退官記念号　特別エッセイ】
岩田靖夫／谷隆一郎／大森正樹／鶴岡賀雄／出村和彦／土橋茂樹／深井智朗／高橋英海
山本芳久／加藤愛美／袴田渉／袴田玲／海老原晴香／坂田奈々絵／平松虹太朗

第 14 号

巻頭言　桑原　直己
神的エネルゲイアの経験と信
——ロゴス・キリストを信じるとは、いかなることか——　谷　隆一郎
390 年代におけるアウグスティヌスにとってのパウロ
——『告白録』の骨格形成に寄せて——　出村　和彦
救済された理性
——サン・ヴィクトール学派の聖書神学と観想論——　中村　秀樹
アウグスティヌス『三位一体論』における実体の相互内在の問題
——中世哲学の視点から——　横田　蔵人
【研究ノート】
アウグスティヌス『音楽論』第 6 巻における魂の鍛錬　北川　恵
擬ディオニュシオスのキリスト論
——「神人的な働き」θεανδρικὴ ἐνέργεια を巡って——　袴田　渉
神の光を見ることをめぐって
——グレゴリオス・パラマスの擬ディオニュシオス理解——　袴田　玲

第 15 号

巻頭言　大森　正樹
【論文】
なぜ人間は悔い改めによってでは救われないのか
——アタナシオス『言の受肉』第 7 章の解釈——　安井　聖
エヴァグリオスのシリア語およびアラビア語による伝承について
——『祈りについての 153 の断章』を例に——　高橋　英海
【研究ノート】
認識の闇を超えた神との出会い
——ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』を中心に——　海老原晴香
『ゾイゼの生涯』における愛と記憶
——共生と和解の地平の物語り論的展望——　阿部　善彦
【特別寄稿】
仮想現実を生きる　柴田　有

第 16 号

巻頭言　荒井　洋一
【フィロカリア・シンポジウム】
観想の文法書としての『フィロカリア』　大森　正樹
『フィロカリア』編纂とその意義　袴田　玲
ダマスコスのペトロスの修行階梯論——「ヌース」の祈り——　袴田　渉
【論文】
愛の変容、或いは愛への変容——『単純な魂の鏡』における超越への開け——　村上　寛
ヨアンネス・クリマクスにおける「神の前に立つ人間」とは誰か　寺川　泰弘
テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』における場所と二神論の問題　津田　謙治

〈コスモス・ノエートス〉をめぐって
——アレクサンドリアのフィロンの場合——　田子多津子
静寂主義者グレゴリオス・シナイテスにおける祈りの随伴現象
——視覚体験、カルディア（心｛臓｝）の熱、喜悦——　久松　英二
“beata uita” 概念と倫理的思考の基盤——『告白』第10巻——　岡部由起子
「造られたものを通して」知るとはいかなることか
——アウグスティヌス『告白』第10巻6章——　佐藤真基子

第11号

巻頭言　野町　啓
暗い絵の構図——アウグスティヌス『神の国』22，22－24における悪の問題——　荒井　洋一
アシキアクムでの自由学芸——初期アウグスティヌスと自由学芸——　水落　健治
イアンブリコス以前以後　堀江　聡
【会設立30周年記念特別講義】
旧約注解者ヨアンネス・クリュソストモス　ロバート・C・ヒル（武藤慎一訳）

第12号

巻頭言　塩谷　惇子
視覚的言語のかなたへ
——『告白』第7巻第10章第16節・『詩篇講解』第41篇——　加藤　武
アウグスティヌスの『創世記』解釈と詩編の引用
——『告白』第12巻に即して——　田内　千里
ニュッサのグレゴリオスにおける救貧と否定神学——名辞の神学への一試論——　土井　健司
アンティオキオア釈義学派におけるエウドキア　武藤　慎一
【ポーリーン・アレン教授講演】
21世紀の視点から教父の社会倫理的テキストを読む際の課題
ポーリーン・アレン（土橋恵子訳）
【加藤信朗著『アウグスティヌス＜告白録＞講義』書評会記録】
加藤武（司会）、水落健治・荒井洋一・久米博（特定質問）、加藤信朗（著者コメント）

第13号

巻頭言　水落　健治
キリスト教修道制の成立——隠修制と共住制——　戸田　聡
修道制における隠修士の意義——その東方的起源と西方的展開——　桑原　直己
アウグスティヌスにおける「音楽」の概念——「魂論」としての『音楽論』——　樋笠　勝士
鳴り響く永遠真理——アウグスティヌス的数理思想の17世紀的展開——　名須川　学
身体を張る(extendere)アウグスティヌス
——『告白』における distendre, continere, extendere をめぐって——　宮本　久雄
【加藤信朗著『アウグスティヌス・告白録講義』書評会記録（続）】
書評会における討論
アウグスティヌス文学のヘブライ的地平
——『告白録』第1～9巻における「キアスムス(交差配列法)」構造——　宮本　久雄

第6号

巻頭言　受容としての教父研究　柴田　有
古代の二人の歴史記述家：ヨセフスとエウセビオス
　——古さをめぐる歴史記述について——　秦　剛平
エイレナイオスの聖霊論　塩谷　惇子
エペクタシスの道行き　宮本　久雄
Augustine the Bishop in the Light of New Documents　Peter BROWN

第7号

巻頭言　宮本　久雄
アウグスティヌスの聖書解釈をめぐって——『神の国』からの視点——　加藤　信朗
淵が淵を呼ぶ——『告白』13, 13, 14 ——　荒井　洋一
真理論の転回——アウグスティヌス懐疑論批判の射程——　岡部由起子
存在の現成のダイナミズム——受肉・神人性の教理と愛智との関わり——　谷　隆一郎
The Neoplatonic Theme of Return in Eriugena　Édouard JEAUNEAU

第8号

巻頭言　小さな神　熊田洋一郎
アウグスティヌス『創世記逐語注解』における霊的被造物の向き直りについて
　——アウグスティヌスの「コンウェルシオ」とプロティノスの
　「エピストロペー」の比較研究のために——　森　泰男
アウグスティヌスの記号論　樋笠　勝士
青銅の蛇の物語——予型論の意義をめぐって——　柴田　有
アウグスティヌスとストア哲学
　——『問答法について』第6章〈言語起源論〉を中心に——　水落　健治
ニュッサのグレゴリオスの情念論——『魂と復活について』を中心に——　柳澤　田実

第9号

巻頭言　谷　隆一郎
異端者の生涯と思想　ポーリーン・アレン
　——アンティオケイアのセウェロスの場合——　（中西恭子訳）
自然・本性（ピュシス）の開花への道
　——証聖者マクシモスにおける神化（テオーシス）の文脈をめぐって——　谷　隆一郎
魂の階梯論における聖書解釈
　——アウグスティヌス『マニ教徒に対する創世記注解』研究敍論——　上村　直樹
エリウゲナにおける動と静　今　義博
アレクサンドリアのクレメンスにおける「訓導者」(paidagogos)の意義　秋山　学
アウグスティヌスにおける確実性の概念——『告白』第7巻から——　中川　純男

第10号

巻頭言　忘れ去られているものの記憶　加藤　信朗
アウグスティヌス『告白』第8巻における回心譚の効用について
　——「おこない」の意味——　松崎　一平

パトリスティカ既刊号目次

創刊号

巻頭言　加藤　信朗
隠喩の生成──Ambrosius, *Hymnus* I から Prudentius, *Liber Cathemerinon* I へ──　加藤　武
トマス・アクィナスにおける摂理と人間の自由──『真理論』第2問第12項──　渡部　菊郎
フィロンの聖書解釈の一側面　野町　啓
アレクサンドリアのクレメンスにおける古典学の変容
──『オデュッセイア』の解釈に向けて──　秋山　学

第2号

巻頭言　泉　治典
アルクイヌスとフレデギスス──文法学・論理学・神学をめぐって──　清水　哲郎
ディオニシオス・アレオパギテース『神名論』における
新プラトン派的言語とキリスト教的言語──『神名論』第2章を中心に──　熊田陽一郎
教父研究の現在　今道　友信
〈始まり〉の問いとその行方──「ヘクサヘメロン」の西と東──　荻野　弘之

第3号

巻頭言　K・リーゼンフーバー
言葉と真理──アウグスティヌス『教師論』における問題の所在──　中川　純男
アレイオスとアレイオス主義再考　泉　治典
ニケアとの出会い──ヒラリウス『三位一体論』と信仰──　出村　和彦
My Life-long Adventure with Saint Athanasius　Charles KANNENGIESSER

第4号

巻頭言　破黙への教父哲学　今道　友信
「語りえぬ者」について──フィロンとユスティノス──　柴田　有
オリゲネスのヨハネ福音書序文（ロゴス賛歌）の解釈
──他のギリシア教父の解釈と比較しつつ──　小高　毅
オリゲネスにおける解釈学的原理──『原理論』と『ヨハネ福音書注解』から──　久山　道彦
「ギリシア人の剽窃」に関するアレクサンドリアのクレメンスの見解　久山　宗彦

第5号

巻頭言　加藤　武
διαλεκτική と λογική
──Ammonios Hermeiou, *In De Interpretatione*, Prolegomena──　水落　健治
テルトゥリアヌスの結婚観　木寺　廉太
悪を選択する自由　岡野　昌雄
Augustine's Roman Empire: Reaching out from Hippo Regius　Neil B. McLYNN